

第5章 考察

第1節 墳丘構築工程の復元

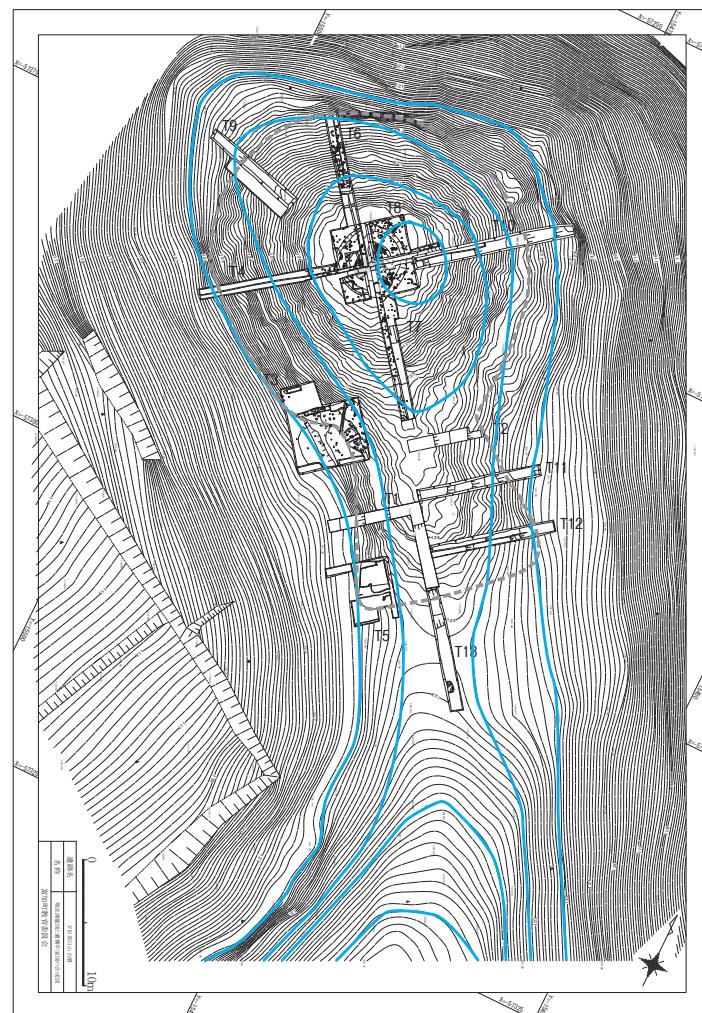
【旧地形の復元】〔第31図〕

各トレンチの調査において検出された地山堆積物や、岩盤の状況などから古墳が築造される前の旧地形を復元してみる。夕田茶臼山古墳が築造された丘陵は北西へ舌状に延びる丘陵の先端部で、丘陵の頂上部はやせ尾根状になっている。尾根の付け根あたりの南西部がピークで、そこから下りながら鞍部にいたり、舌状丘陵の先端へ向けてまた緩やかな登りになっている。

現況地形を観察すると、標高122m辺りで丘陵の傾斜が変化し、それより下は急傾斜になるため、標高122mのコンターラインがおよそ尾根の旧地形の形状と考えられる。北西へ延びる尾根が、先端付近で西へ緩やかに曲がるような形状となっている。岩盤や地山堆積物の傾斜角などから推測して、丘陵の頂上部の推定標高は126.5mほどで現在とあまり変わりない。しかし頂上部の面積は、現在よりもかなり狭く直径5m程度と想定される。また、尾根先端部では西側の傾斜が緩やかで東側は急であり、頂上のピークは現在よりも3~5mほど東であったと考えられる。

この旧地形に墳形を重ねると、古墳が丘陵尾根のやや西側へ寄った位置に構築されていることがわかる。おそらく東側は旧地形の形状をほぼそのまま利用し、後円部の西側の墳丘端部を尾根の西端に設定したのだろう。このために西へ迫り出す形となつたのだろうが、「西へ迫り出す」ために後円部西側は結果的に大規模な基盤造成をする事になった。このことから「西から見られる」「西へ見せる」事を意識していることは想像に難くない。

古墳の軸は尾根の向きに合わせるように設定されたこともわかる。前方部はこの尾根の形状を活かすように設定されており、それは盛土の状況からも読み取れる。尾根の西端を後円部墳丘端部と決めて、前方部は尾根形状を活かすという設定をした場合、必然的にこの傾きになるといえる。旧地形への墳形の割付では、この2点が重視されたように思われる。



第31図 旧地形と墳丘の関係

【後円部の墳丘構築工程の復元】〔第33図〕

各調査区の調査成果や、T10・T8・T4土層図を接合した後円部東西横断図（第33図上）とT6・T8・T7の土層図を接合した後円部南北縦断図（第33図下）や縦断面図（34図）を基に、墳丘構築工程を復元した（第33図）。

■第1段階……地山削平工程

後円部の東側は標高125.5mで地山頂上部を削平している。一方、西側は標高123mと東側より2.5m低い位置で地山を削平している。北側T6、北西側T9においても同様に低い位置で地山を削平している。東面は前方部も含めて傾斜面も岩盤まで削平している。

また、墳丘の端部となる部分は、T10・11・12の調査成果から岩盤を階段状に削って平坦部を作っている。特に東側は墳端部裾を一定の幅で巡っている可能性がある地山削平工程での墳形の「輪郭づけ」を行っている可能性が高い。

■第2段階……基盤造成工程

後円部西側T4の調査では標高123mの低い位置で地山を削平して、その上に3工程にわけて水平に盛土している状況が確認された。同様の状況は北側T6、北西側T9、南側T7においても認められる。そして、これらの水平盛土の上面が標高125.5mでほぼ揃っているのが興味深い。おそらくやせ尾根状の丘陵頂上部を削平しているため、埋葬部を構築するための十分な面積の平場が確保できなかったのではないか。北・西・南側に「盛り足し」を行うことで、必要な面積を作り出したものと想定している。これにより直径約14mの平坦面を造成している。基盤造成のための盛り足しは地山傾斜が緩やかな北、西、南側に三日月状に造成されたと推定する。

■第3段階……造成面調整工程

T10・T6では基盤造成面の上に赤褐色の粘性土が敷かれている状況が確認できた。T8で確認された棺底のレベル（標高125.7m）とT10の地山削平レベル（標高125.5m）の標高差20cmはこの工程分であることがわかる。おそらく基盤造成面上に20cmほどの土を盛ることで、造成面の高さ調整や整地を行うという意図があったものと思われる。

■第4段階……周提状盛土工程

基盤造成面の周縁部に3～4m幅の盛土を周提状に巡らせる。周提状盛土は外縁部から2～3工程に分けて外から中へ盛土している。周提状盛土の高さは1.2～1.4m程度である。周提状盛土は拳大礫が多く混じる。

■第5段階……埋葬及び墳丘盛土工程

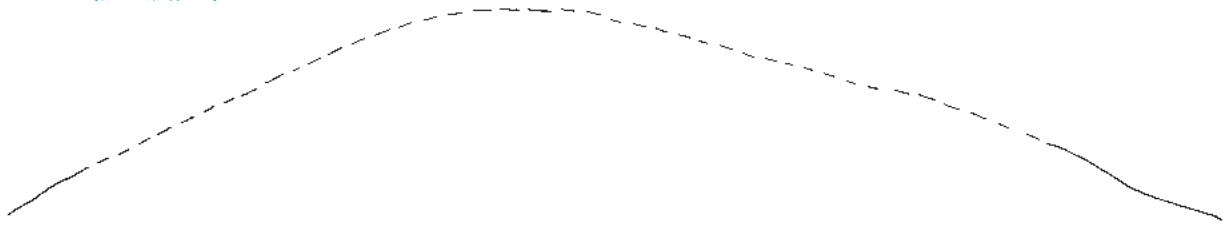
墓壙は構築墓壙と推定した。盛り残した周提の中央部に木棺を据え、棺の周縁部を小礫混じりの粘性土で埋める。その後、棺の上部に大きめの礫を混ぜた土で埋め最後に全体を周提の上面まで埋める。墳丘の完成後にはさらに上面に粘性土に小礫を混ぜた土を全面に10cm程度盛っていると思われる。

上記の後円部の墳丘構築工程は、大きく分けると基盤を造成する段階と埋葬部を構築する段階の2段階に分けられる。前述したように、着手の当初から埋葬部の規模についてはイメージや想定があり、丘

127.5

127.5

〔旧地形推定〕



〔地山削平工程〕



〔基礎造成工程〕



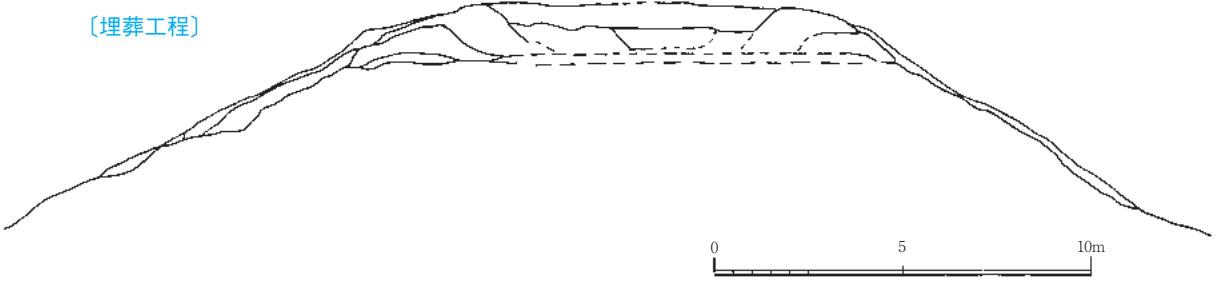
〔造成面調整工程〕



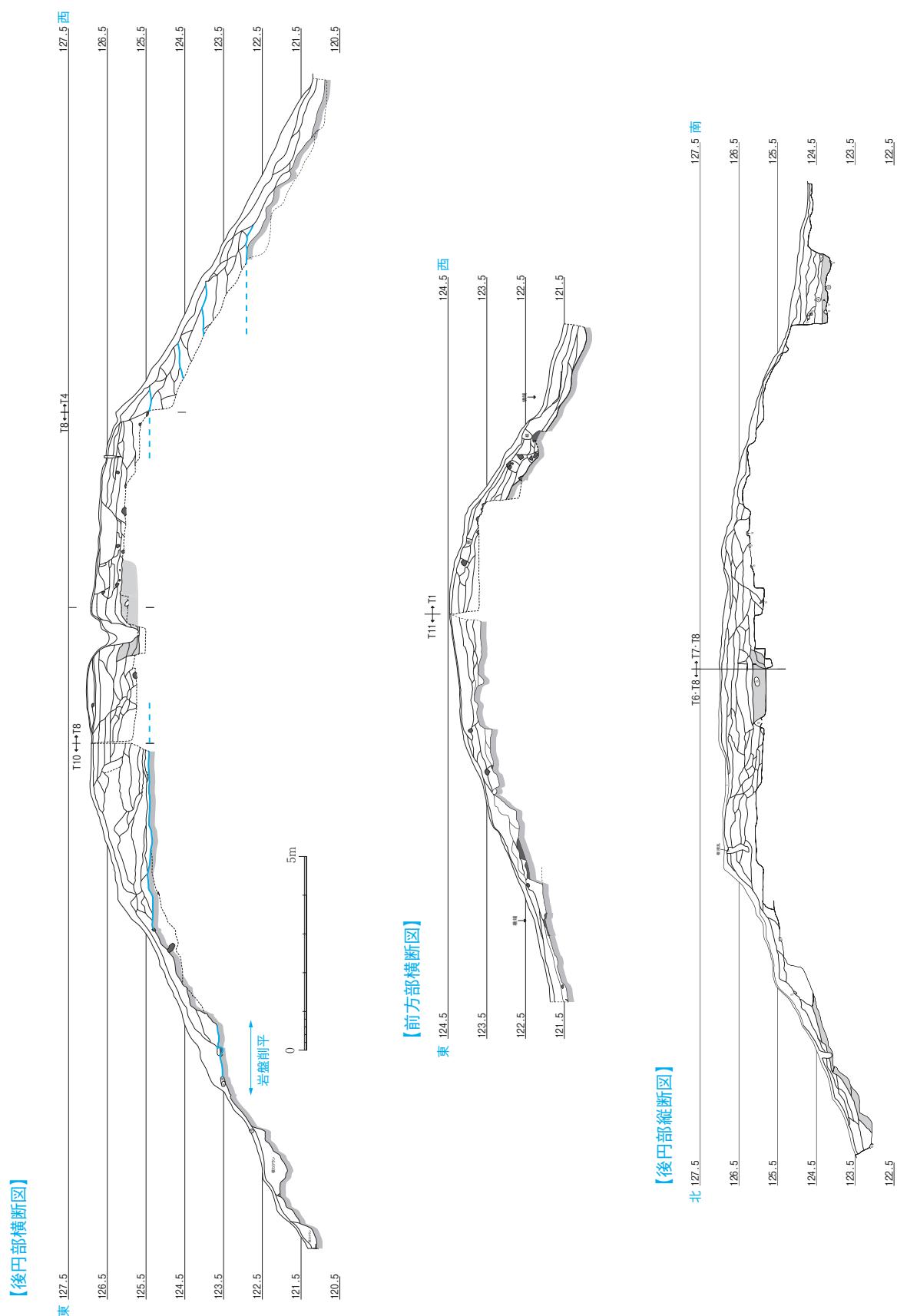
〔周堤状盛土工程〕



〔埋葬工程〕



第32図 後円部築造工程復元図

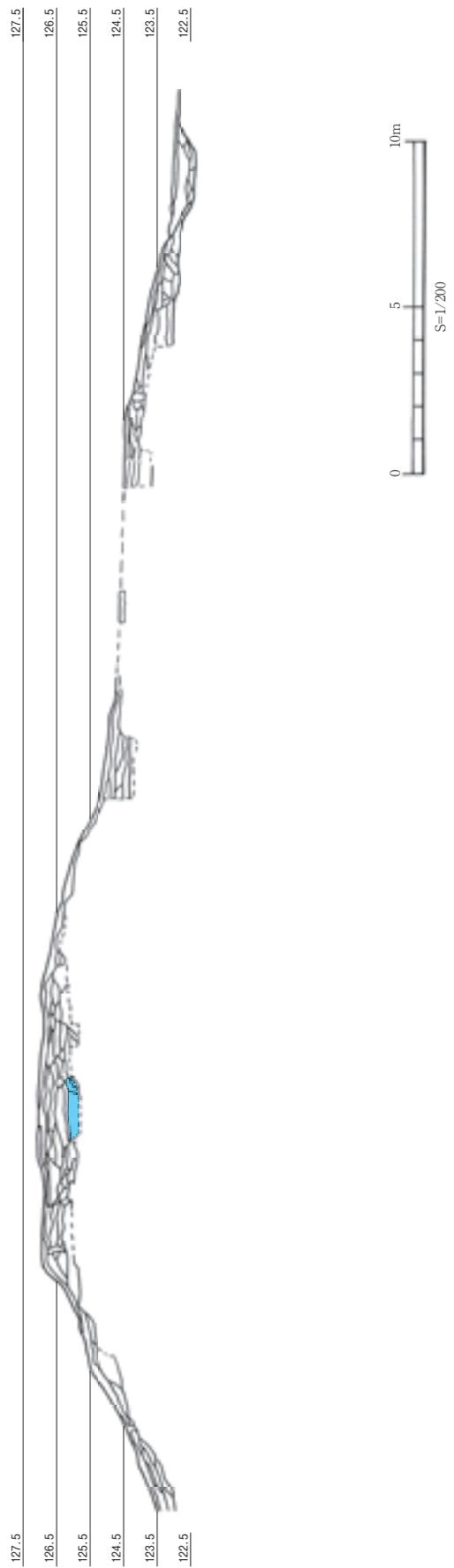


第33図 墳丘縦横断図① (S=1/150)

【前方部前面縦断図】



【墳丘縦断図】



第34図 墳丘縦横断図② (S=1/80, 1/200)

陵上にそれを構築するために基盤造成を行っていると思われる。埋葬構築部分自体は直径 14m ほどであり、弥生時代終末期の墳丘墓の規模とそれほど相違ない。大規模な造成面の上に墳丘墓を造ったような印象を受ける。

【基盤造成から埋葬部構築への連続性について】

第3工程の造成面調整工程で敷かれた粘性土上面において炭化物や焼土が散布することが T 10 の調査で認められた。限られた面積の部分的な調査であるので、全体の詳細な状況を把握したわけではないが、この状況について若干の所見を加えておきたい。

炭化物は樹種同定の結果「バラ属」と「クワ属」と判明した。材としてあまり使用しない樹種であり、周辺に繁茂していた植物を基盤造成面で燃やしていると考えるのが妥当であろう。古墳築造にあたっては地山の削り出しなどを行っているので、周辺雑木などの処理はそれ以前に行っているはずであり、なぜ基盤造成の段階で周辺植物の炭化材が出るのかは気になる点である。

造成儀礼や、作業中に暖をとったなど可能性は幾つもあるが、「バラ属」植物が検出された点に着目してみたい。バラ属に関しては繁殖力は強く、棘を持つため今でもその処理は手間取る。樹木を伐採し、表土が流れた山野でも繁茂すると聞く。少し踏み込んで推測するならば、近くに繁茂している植物や雑木を「燃焼消却」した結果とも考えられるのではないだろうか。その場合、状況の解釈として何故、基盤造成面で燃却を行ったのかが気になる。一般的に考えて、伐採した樹木をあえて丘陵上へ集めて燃やすのは効率的ではない。ましてや大規模な土木工事で整備した面であれば尚更であろう。「燃焼消却」であれば、基盤造成面あるいは墳丘上に繁茂した植物を燃やしたと考える方が蓋然性が高いように思える。そうであるとするならば基盤造成が完成してから、埋葬部の構築までの間に一定の期間が空いていた可能性が考えられる事になる。この想定が成り立つならば、選地から基盤造成までを被葬者の生前に行っている可能性が考えられる。断定的に言及できる状況ではないが、ひとつの可能性として提示しておく。

【前方部の墳丘構築工程の復元】

前方部については、丘陵の尾根上部に収まるように設計されており、基本的に地山削り出しで輪郭づけを行い、その上に凝灰岩礫を混ぜた土で盛土を行っている。くびれ部については地山を平面的に抉るように大規模な削り出しが行われており、T 3 で検出された、テラス状の平坦部はこの地山削り出しによってできたものであると考えられる。

前方部の横断面図（第33図中）をみると旧丘陵の頂上部は平坦に削平されている。縦断図（第34図）をみると頂上部の削平は前方部前面側では標高 123.5 m で、後円部側では 124.5 ~ 125.5 m であるので、緩やかな傾斜をついている事がわかる。おそらく旧地形の傾斜に合わせて、頂上部を平らに均し、その上に 60 ~ 80cm の盛土を施している。

前方部の傾斜角は東面が 30 度前後であるのに対し、西面は 40 度近くあり急である。横断面図でも旧地形よりやや西へ迫り出している事が確認できる。盛土も、西面は礫を多く混ぜており、傾斜変化点には人頭大の礫を土留めで用いている様子が確認できた。後円部同様に西面を丁寧に造っており、西からの眺望を意識していると考えられる。

T 5 の調査結果から、前方部前面及びコーナー部分については、地山削り出し段階で大規模に削平し「輪郭づけ」を行っている。T 1 で検出された溝 SD01 については、この輪郭づけの段階で設定された

ものと推定した。最終的には区画溝 SD02 が設定され、前方部前面とコーナー部分に盛り足し（第34図上前方部盛り足し部）を行って形状を作出している。こうした構築方法について類例をみることができなかつたが、当古墳においては基盤造成段階においての盛り足し工程が確認されており同じ工法を前方部にも応用したと考えている。

【前方部構築と後円部構築先後関係】

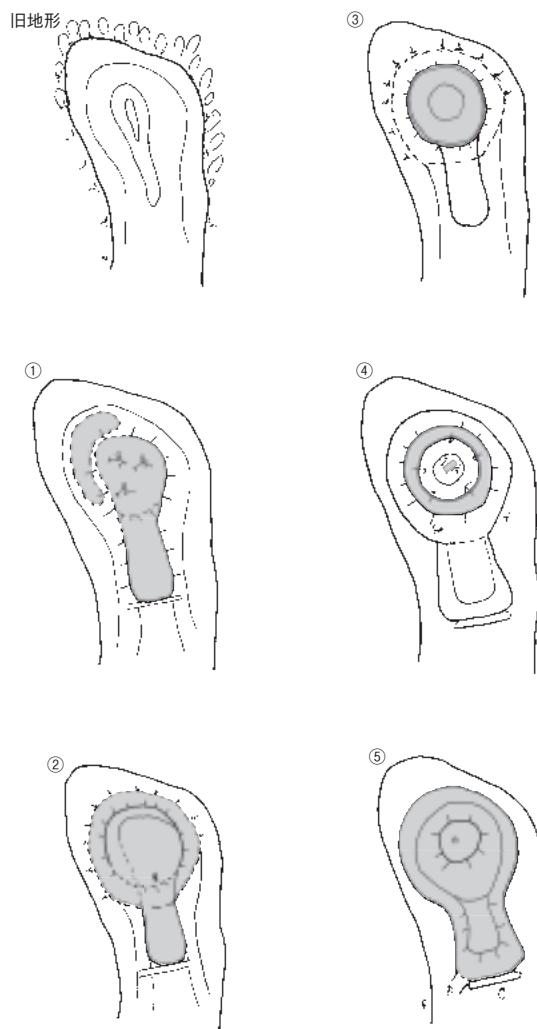
T7の調査によって、前方部の丘陵頂部削平面の上に後円部の基盤造成盛土が堆積し、その上に前方部盛土が堆積することが確認できた。このことから、後円部基盤造成は、前方部の盛土に先行する事がわかる。埋葬部構築と前方部盛土の先後関係については盛土の直接の重なりがないため判別できないが、ほぼ同時に構築されたと考えておきたい。

【まとめ】

以上の成果を整理し、推定される古墳全体の構築過程を提示しておく（第35図）。

- ①地山を削り出して整形することで、墳形の輪郭を形作る。墳端部には平坦部を設けるなど輪郭づけも行う。後円部西半には盛り足しのための削平段を掘削する。
- ②後円部の西半部分に盛り足しを行い埋葬部の基盤造成を行う。
- ③後円部基盤造成面に20cm程度の粘性土を敷いて整地する。
- ④後円部基盤造成面の外縁部に周提状盛土を施し、墓壙を構築する。前方部前面に区画溝を掘削し、前方部を盛土して成形する。
- ⑤棺を埋葬して埋める。礫混じりの盛土を全面に施す。

夕田茶臼山古墳の造営に関して特徴的なことは、大規模な基盤造成を行っている点である。この点において、周辺地域の弥生墳丘墓とは一線を画する。一方、埋葬部の構築に関しては、弥生墳丘墓との類似性が指摘できるとともに、規模においてもそれ程の格差はみられない。弥生時代から古墳時代への過渡期の様相を良好に示す構築方法であると考える。



第35図 夕田茶臼山古墳 築造過程模式図